

古田土会計事務所 第27期経営計画発表会

経営計画発表会、それは古田土 満が全身全霊をかけて作った今期の経営方針を、先頭に立って実践することを誓い、発表し、所員はこれを受け、全社一丸となって協力することを宣言する場である。

平成21年1月14日(水)、第27期経営計画発表会を下記の要領で催したくご案内申し上げます。

◎ スケジュール

午後1時11分開始 (受付開始12:00~)

◆第一部 発表会

1:11 開会の辞
1:15 講演開始

日本理化学工業(株) 会長 大山泰弘氏
「中小企業の社員に働く喜びを」

2:45 講演終了
(10分間の休憩)

2:55 経営計画発表
古田土 満

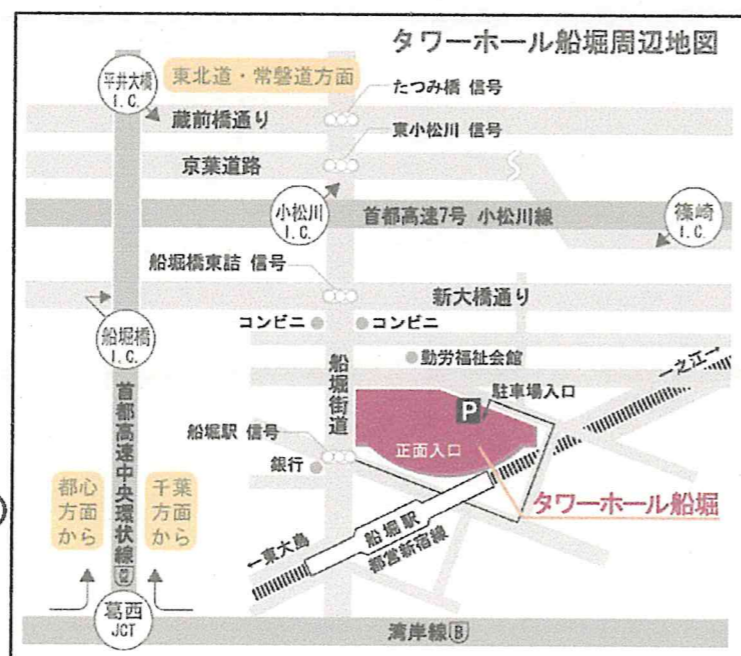
4:20 決意表明
4:30 閉会の辞

◆第二部 懇親会

4:40~6:00

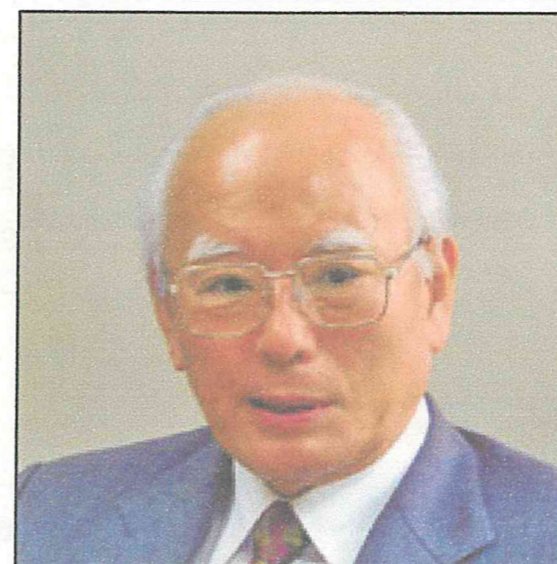
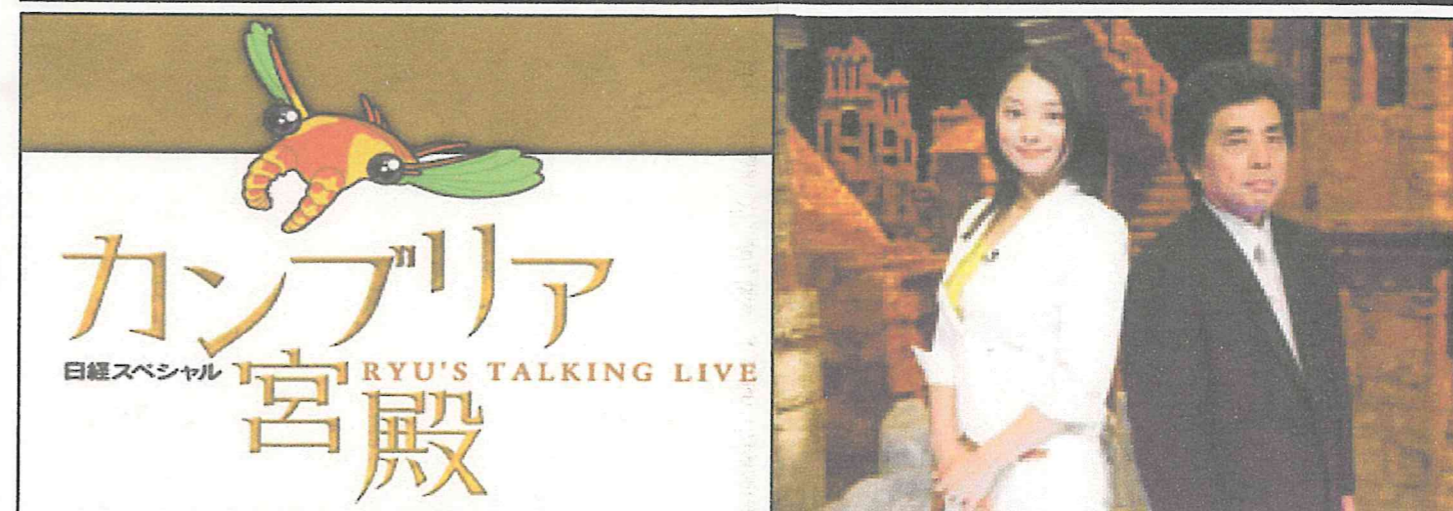
◎ 会場:タワーホール船堀
(都営新宿線 船堀駅より徒歩1分)
TEL:03-5676-2211

◎ 会費:お1人様1万円



今回は会場を拡大して皆様をお待ちしております。お席に余裕がございますので、ぜひ社員の方々もお誘いいただき、経営計画発表会を体感していただければと思っております。

11月3日 TV東京 『カンブリア宮殿』に出演!



大山 泰弘 [おおやま やすひろ]
日本理化学工業株式会社
代表取締役会長

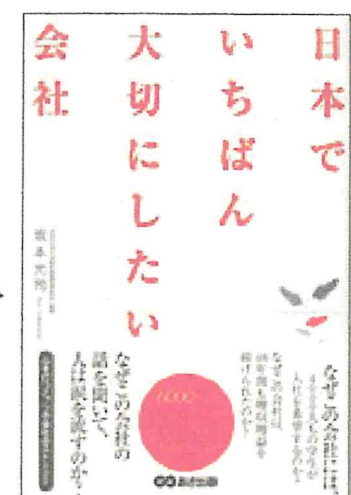
1932年東京都生まれ。
74年に創業者である父の後を継ぎ、社長に就任。
障害者の採用、労働環境改善の取組みで、昭和56年内閣総理大臣表彰、平成15年厚生労働大臣表彰、平成16年春の叙勲、瑞宝単光章、平成17年企業フィランソपी大賞特別賞 授賞。

障害者雇用の先進企業、それが日本理化学工業だ。80名の全社員のうち60名が知的障害を持っている。「相手に与えることによって、それはブーメランのように自分に返ってくる。社員のおかげで、素晴らしい人生をいただいた。」と語る大山氏。



◀ チョーク市場ではシェア30%のトップメーカーでありながら、ガラスにもかける、粉の出ない固形マーカー「キットパス」など、次々に新需要を創造している

古田土会計の第25期経営計画発表会での講演がきっかけで出版された ▶ 坂本光司先生のベストセラー『日本でいちばん大切にしたい会社』。この中にある、日本理化学工業が初めて障害者を採用した時の感動秘話は、涙なくしては読むことができない。まさに日本でいちばん大切にしたい会社の一つである。





縁を生かす

その先生が五年生の担任になった時、一人、服装が不潔でだらしない、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の一年生からの記録が目に残った。「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ」とある。間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

二年生になると、「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。三年生では「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りする」。三年生の後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」とあり、四年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子どもに暴力をふるう」。

先生の胸に激しい痛みが走った。だめと決めつけていた子が突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に立ち現れてきたのだ。先生にとって目を開かれた瞬間であった。

放課後、先生は少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事をやるから、あなたも勉強していかない？ 分からないところは教えてあげるから」。少年は初めて笑顔を見せた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手をあげた時、先生に大きな喜びがわき起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで開けてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくとも飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ、お母さんの匂い！ きようはすてきなクリスマスだ」

六年生では先生は少年の担任ではなくなった。

卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。そして、いままで出会った中で一番すばらしい先生でした」

それから六年。またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができま

す」
十年を経て、またカードがきた。そこには先生と出会えたことへの感謝と父親に叩かれた体験があるから患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締めくくられていた。

「僕はよく五年生の時の先生を思い出します。あのままだめになってしまふ僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、五年生の時に担任して下さった先生です」

そして一年。届いたカードは結婚式の招待状だった。

「母の席に座ってください」と一行、書き添えられていた。

「致知」連載にご登場の鈴木秀子先生に教わった話である。

たった一年間の担任の先生との縁。その縁に少年は無限の光を見出し、それを振り所として、それからの人生を生きた。ここにこの少年の素晴らしさがある。

あしがふんいせいせい

「いせいせいせい」藤尾秀昭著

「精進」の契符(女の世帯)

春秋

秀峰岩木山のふもと、弘前市の木村秋則さんのリンゴ園は、たわわに実った早生種の「つがる」の収穫にたんやわんやである。「いやー、(リンゴが)成って成って」と小躍りする。無肥料・無農薬のリンゴ園をさわやかな秋の風が渡る。

▼その足元のふかふかした土の感触を確かめながら青森県庁や農業試験場の職員らが作業を見守る。木村氏は県や農協の農薬散布マニュアルに従わず自然栽培を貫き通して「奇跡のリンゴ」にたどり着いた。かつて徹底管理を求めて苦情を言いに来た職員から、みごとに現実を目の前に「協力を」という話も出る。

▼宮城県のある農協では木村農法による米の自然栽培を始めた。一部有志によるものだが農薬を販売する農協の動きだけに画期的である。一般栽培並みの収穫をあげる木村さんに比べ、十割当たり五、六割と少ないが、あらゆる菓子をつくる東京の製菓店が無肥料・無農薬の米ゆえ、倍の価格で全量を引き取ってくれる。

▼日本の農業は農水省や農協の言うことは無批判に信用し実行してきた。「複合汚染」という過去の苦い経験も忘れて。木村さんは以前こんなことを語った。「農政を司る人は一回、畜産、漁業、米やリンゴづくりを二年間実習して、それを体験しない限り認めないとしたらいい」。太田農相は、それも時間切れだ。